
生徒会長様々？

夏蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長様々？

【Nコード】

N6723Z

【作者名】

夏蜜柑

【あらすじ】

「生徒会に入れと三日ほど前から言っているはずだが。君は理解していないのかい？」

入学して一週間後に先輩である坂本夾に目を付けられてしまった藤沢優貴は、夾が大嫌いだった。なぜなら彼の本性は、口を開けば皮肉か嫌味で人を馬鹿にするような薄ら笑いをする俺様だったからだ。

ごくごく普通の生活を送りたい主人公と俺様である先輩の生徒会の駆け引きです。

「1」入学と平凡と先輩

暖かい日差しが降り注ぐ春。この季節はいつも高揚と期待が混じった気持ちになる。

私は、憧れていた如月高等学校（かきづき）に入学した。

何事も起こらない平凡な生活を送れると思って、嬉しかった。

……そう思っていたのに。

私の期待は、入学してから一週間後にあっさりと裏切られた。

* * *

眠い4時間目を乗り切って、ようやく待ちに待った昼休み。

ああ、肩が凝ってるな。伸びてると、すぐ関節部分が痛い。ばきばきと音が鳴るのは気のせいだろう。

「あーだるい」

「お疲れ。もう四十肩？」

むっとして視線を向けると、友達の愛実（まなみ）が笑いながら弁当を持ってきた。

「失礼な。まだ私は若いっちゅーの！」

膨れっ面をしながら、私も弁当を出した。

愛実は、なんでも言いたいことはばっさり口に出す性格で一緒にいると自然と付き合える。まだ入学して十日すぎたところだけど、馴染めてきた。

「あ、そついえば。今日もあの人が来るかもね」

「……………」

硬直したように箸が止まった。

愛実は、にやにやしなから私の表情を愉しんでる。意地が悪くて

腹黒いのは、どうにかしてほしい。

「三日前からずっと来てるよね。飽きもせずに。いい加減、承諾したら？」

「嫌。絶対に嫌だ」

「うわー、本当に頑固。何が嫌なの？ 普通さあ、はい喜んでとか言って引き受けるでしょ」

「……………」何も言えない。

理由とかはないけど、なんとなくあの人が気に入らない。

「だって、面倒くさそうじゃん。私は、普通に生活したい」

「ふうーん。そうゆうもんかねえ」

「だって、愛実はその人の性格を知らないから、そう思うんだよ！
だって、あいつの本当は」

直後、思いつきり勢いよく教室の扉が開いた。そして、鼓膜を揺さぶるような激しい音が響き渡った。……誰だ、馬鹿みたいに勢いよく来たやつは。

「藤沢優貴ふじさわ ゆうきは、いるか？」

聞き覚えのある深みある声。頭全体に浸透するような低い声。何度聞いても聞き惚れるような美声だと思う。そんな声で自分の名前を呼ばれれば、誰だつてどきつとする。

私は聞こえたけど、あえて無視して知らない振りをする。

「……………優貴。いいの？ 呼んでるよ？」

こっそり愛実も耳打ちしてくるけど気にしないで、ぱくぱくと弁当を食べ始める。

クラス中の視線が私に集まって、恥ずかしいし痛い。

気まずい雰囲気の中黙々と食べるけど、途中で物凄い力で右手を掴まれた。その反動で立ち上がった。

「ちよつ？」

私の制止の声を無視して、こいつは手を引いて連れて行くつもり。足を踏ん張って抵抗したけど、やっぱり力の差はあるから、無駄だった。

「ちよつと、ねえ？ 待つて？」

とりあえず、急いで箸を置いた。そして、そのままずると引きずられて行く。

ああ、もう。本当に意味が分からない。なんで私がこんな目にあわないといけないのか。昼休みの時間は潰れるし、ろくなことがない。

……最悪。

* * *

旧校舎の屋上前の階段の踊り場で私は、ようやく解放された。

溜息をつきながら、自分をここまで連れてきた奴を睨む。

180ちよつとある身長。長くも短くもない黒髪。幼く見える童顔。見透かすような鋭い瞳。余裕そうな口元。

これだけ見れば、かっこいい部類だと思う。私のタイプじゃないけど。

私はわざと仏頂面で彼を睨む。

「……私に何のようですか。坂本先輩」

先輩はその態度が気に入らなかつたらしく、ギロリと私を睨んだ。……怖いけど、気にしない。

「生徒会に入れと三日程前から言っているのだが、君は理解していないのかい？」

愉快そうに歪められた口元から嫌みつたらしい言葉が、いらつく。こいつは嫌味か皮肉しかいえないのだろうか。人を馬鹿にするのも

いい加減にしると思う。

「ですから、私はお断りしますと言ったはずです。理解されていないのは、先輩のほうじゃないんですか？」

嫌味には嫌味を。私も口と性格の悪さと負けず嫌いには自信がある。

先輩は薄ら笑いを深め、喉をククツとならして笑う。

「次期生徒会長候補の私が君を指名すると言っている。つまり、君に拒否権はないんだよ。この学校の生徒会の制度については、もちろん知っているはずだろうが」

「何度も言いますが、お断りします。私は生徒会に入る気なんてないですし、入りたくもありません。他の人を指名してください」

それじゃあ、と階段を下りていこうとしたが、また強い力で右手が引つ張られた。制服の上でも細身に見える先輩は、一体どこからこんなに力が出るのだろう。

「何ですか！」

苛立ちを隠さずに私は勢いよく振り返る。

すると、先輩の顔が近くに迫ってきていた。

「！」

近い、近い、近すぎるでしょっ！ こっち来るなっつーの？

先輩は私の顔を見て、にやりと笑って口を私の耳に近づけた。そして、呟いた。

「？」

その次の瞬間、私は右手を振り放して急いで階段を下りた。

* * *

一年の教室が立ち並ぶ廊下前の階段でようやく足を止めた。

まだ顔が火が燃え移ったかのように熱かった。おそらく、顔は林

檣のように真っ赤に染まっているのだろう。

ほ、本当に意味分からない。あの先輩は。なんで、私が目をつけられないといけないのよ！

そして、私が去る間際に言われた先輩の言葉を思い出した。

『私から逃げられると思わないことだな』

思い出す度に恥ずかしくなってくる。こういう事を平気で言えるあの男は、変態というより頭がおかしいんじゃないだろうか。しかも、あの人を馬鹿にするような笑みでよくも……。

「あっ！」

まさか私は、あの意地の悪い先輩にからかわれ、弄てばれたってこと？

そう考えると、嫌みったらしい薄ら笑いもそのせいだと気付いた。恥ずかしさがなくなってくると同時に、私の中で沸騰したような怒りが浮かび上がってきた。

やっぱり、関わるとうるくな目にあわない。

私は、絶対にあの先輩とは関わらないと心に決めた。

「1」入学と平凡と先輩（後書き）

恋愛物に初挑戦です。

読みにくい点もありますが、それでも読んでいただけたら嬉しいです。

「2」溜息と不安と毒ミルク

この如月高等学校の中心となっているのは、生徒会と部活連合、委員会だ。

この中でも圧倒的な支配力を持つのは生徒会だった。

毎年、夏休み前に生徒会長選挙が行われる。そして、生徒会長が生徒会役員を指名することができる。一、二年生という条件を守れば、男女比及び学年を気にすることなく選んだ人物を思うような役に就かせることができる制度があるのだ。

その制度のため、ほとんどの生徒会長候補は春の段階である程度の人材を考えなければならぬ。

しかし、入学一週間後というのは些か早すぎるものだろうと誰もが思っていた。

* * *

「ですから、断りますって言うているはずですよ！ 何度言ったら分かるんですか。私は生徒会に入りません！」

「入らないって言うっても君に拒否権はないんだって何回言ったら理解してもらえるのかい？」

「一生理解する気になりません」

「まったく……ただ君が承知してくれば簡単なのだがね」

このうるさい勧誘も相変わらず続いている。勧誘が始まってから二週間たったと思う。それにしても、執着というかしつこ過ぎると思う。私はすでに怒りを通り越して、呆れてきていた。もう教室内の同級生もこの先輩が来ることに慣れてしまったのだろう。勧誘が来ないとき（といっても一、二回）は、同級生達から『今日はどう

した?』と心配(?)されるほどだ。

「どうした、君。溜息なんかついて」

「えっ。何でもないです」

拙い。心の声が出てしまったらしい。

「そうか、私はもう帰る。次こそは考えといてくれ」

そう言つと、先輩はとつと教室から出て行ってしまった。

* * *

「あれ? もう、帰つたの? 今日は、随分と早く終わっちゃったね。何かあつたの?」

先輩がいなくなつた途端、愛実がにやにやしなからやって来た。

絶対に私をからかつておもしろがつている。

「さあ、分かんない。でも今日はすぐ帰ってくれて、よかった」

「これでもう愛想つかされて優貴のこと諦めたりしたら、どうする

? (笑)」

なんでそんなに楽しそうなのか分からない。しかも、(笑)ってなによつ?

「別に、どうでもいい。っていうか、諦めてほしいっ! そのほうがいい!」

そうしたら、もう毎日しつこく勧誘されないうし、やっと平凡な生活が送れるようになるはずだ。できることなら、目立たずに学校生活を充実させたいと思ってるんだけど。

「えーでも……あの先輩に目をつけられたら終わりだよ。私は、確実に優貴が生徒会に入ると思うね」

愛実は噂とか評判とかに詳しい。だから、先輩の噂やらも耳にしているんだろう。

「はあー!? 私は入らないから。ありえないって」

「んじゃ、購買のパンおごりで賭けね」

むすつとした私に、愛実は生き生きとした表情で笑いながらそう言った。

私が頑固で絶対に入ろうとしないことを知っているのに。

* * *

翌日、先輩は私の前に姿を見せなかった。

* * *

「最近、来てないね。今日は来るのかな」

「さあ、どうだろう」

最後に先輩が教室に来たのは、丁度一週間前だった。

四月最後の週になっても先輩が現れるようすはなかった。いつもなら、本鈴がなった五分後には堂々とやって来るのに。

いつも来る人がいなくなると、なんとなく違和感があった。それが一週間も続いてて、気持ちが悪くなる気がする。

ちよつと!？ これって、私がいかにも毎日期待してますって言ってるじゃない？ 寂しいとか……じゃないと思うし、残念というか、ホツとしているというか……これは違和感なのかな。

私の中で表現できないモヤモヤとした気持ちが悪完全燃焼してる。「優貴はやっぱり、寂しいとか思ってる？」

「ぶっ？」

口の中の苺ミルクを吹き出しそうになった。危なかった。さすがに吹き出すのは汚いか。

「な、なんでそんなこと！」

心の中読まれた？ いや、その前に私は寂しいなんて思っていないはず！

「ありや、凶星な 「ちがうってば」

紙パックを机の上に勢いよく置いて、購買人気のカレーパンをばくばくと頬張る。せつかくのパンが台無しだ。どうして、食べる時にそんなくだらなことで悩まないといけないんだらうか。

愛実は何か言いたい顔をしてたけど、それ以上この話題に突っ込まず、別の話題を話した。

私はもう考えたくなかったから、愛実が何も言わないで別の話をしてくれたのは有難かった。

* * *

大丈夫。私はいつもと違うことがあって心配しているだけ。

先輩は本来私と関わる人じゃないんだから、関わらないだけ。

私が望む生活が実現しただけ。

いきなり変わったから、気持ちが追いつけなくて混乱してるだけだ。

そうやって、私の中で浮かんでいるもやもやとした気持ちを納得させた。

「3」腐れ縁と部活と昼休み

世の中では誰だって苦手な人間はいると思う。私にとって、それは高野直樹だった。家が近くだから幼稚園、小中学校が一緒なのはいいとして、高校まで一緒となればうんざりする。幼馴染を通り越して、腐れ縁すぎる。もはや、ここまでくれば呆れて笑うしかない。まあ……すべて同じクラスじゃないことは不幸中の幸いだと思う。

だけど、今年は運悪く直樹と同じクラスだった。もうこんな仲だから入学当初から話してたら、クラス中の同級生から、幼馴染で付き合ってたの？ とか誤解された。直樹は外見だけはいいから、狙っている女子達から非難の目が向けられて、弁解するのが大変だった。あの女子たちの威圧感はい出したくもない。女って怖い。

そういうこともあって、直樹にあんまり関わらないようにしてたけど、最近はその先輩のことでいっぱいだったから、そのことをすっかり忘れてしまった。

* * *

四月最後の金曜日にそれはやってきた。

「優貴はなんか部活やんのー？」

声がかけられた気がして、私は宿題をしていた手を止めて顔を上げた。

ようやく春らしくなった暖かい光が、朝が弱い私の目に入って眩しい。

「え？　なんか言った？」

直樹は私の前の席に座って、宿題を覗き込んでいた。十分に整っている顔にこげ茶色の髪、耳にしているピアス、着崩している制服。

幼馴染の私が言うのもあれだけど、外見は若干悪そうなホストみたいだと思う。これだけ良ければ、もてるのも当然かな。

「だーかーらー、優貴は部活に入るのって聞いたんだけど」

それは唐突で今更な質問じゃないの？ 直樹は私が部活をやってもやらなくても関係ないことだと思っけど、聞くのは普通なことかだけど、今更だ。実は、月曜日の段階で入部届けは渡されていて、確か来週の月曜日が提出日だった気がする。曖昧なのは、私は特に興味もなかったから。

「特にやりたい部活はないし、やろうと思わない」

直樹が目を丸くした。まあ、それはそうだろう。部活にここまでやる気がない高校生は中々いないだろう。私は小さい頃から変わっているって言われ続けてたし、それは自分でも分かっている。

「うん……。なんか、優貴らしいね」

私らしいって何よ。

たぶん、顔に出てたんだろう。直樹は笑いながら言った。

「我が道を行くって感じた。だって、自分の意見を変えようとしな
いだろ？」

直樹の言っていることが当たってて、驚いた。確かに私はその通りだった。これは、私の中でも長所でもあり、短所でもあるところだった。よく言えば自分を持っているけど、悪く言えば協調性が無いことだから。

「……そうだけど」

「あーあー。優貴の性格知ってるのに、部活のこと聞いた俺が馬鹿だったなー」

いきなり、何よ。その言い方は！

「あ、直樹はまだ決まってるの？」

直樹は中学校の頃短距離を走っていたから、てつきり陸上部だと思っていた。

「うん。それがさ……陸上か水泳かサッカーか軽音楽部に迷っているの。だから、参考程度に聞こうと思ったんだけどなー」

まったく、役に立てなくてすいませんね！

「ふーん……って、え？ 軽音楽部？ 直樹って何か楽器できたっけ？」

直樹は運動系は何をやってもすごいのは分かってたけど、音楽とか得意じゃなかった気がする。

「ああ、言っただけだったっけ。俺、部活引退した後からギターやってるんだ。全然ただけだな」

「じゃあ、軽音楽入ればいいんじゃないの？」

「……………そうすっかな」

「最初から入る気だったら、私に相談すんなー！ こっちはまだ、英語の宿題終わってないんだから！」

悪かったなと言って、直樹は友達の輪に入ってしまった。

本当に何しにきたんだろう？

私がやっていた宿題はまだ半分も終わっていなかった。

* * *

私はいつもお弁当というわけでもなく、週に二回くらいは食堂が購買を利用する。今日の金曜日は購買でパンを買った日だった。購買に遅い時間に行くと、おいしいのかよく分からないパンしか買えなくなるので、授業が終わった後すぐに教室を出た。だけど、あいにく授業が長引いてしまったせいでいつもより遅かった。

あのド えもんめっ？ 絶対わざとだろう！（注：あの国民的人気の青い狸じゃなく、小太り独身の歴史教師）

心の中にある行き場のない怒りと悪戦苦闘中の私に「あなたが……藤沢優貴さん？」と声がかけられる。

気持ちをポーカークフェイスでなんとか抑えながら、振り返ると……数名の女子生徒がいた。よくいるあんまりお近づきになりたくな

いような人たちが。

「はあ、そうですね」

他人向けような微笑をしたつもりだけど、頬が引きつってる気がする。

何のようですか？　　と言おうとしたけど、その前にリーダー格らしく黒髪をセミロングにした女子生徒が一步前にでて、口を開いた。

「ちょっと、話があるのでついてきてくれないかしら」

「……」

これって絶対にあれですよ。この人たちに言葉で責められ苛められるパターンか！　ほら、絶対にまちがいない！　この人、微笑んでるけど目は笑ってないし、敵意が滲み出てる？

本音は行きたくない。誰だってそうだろう。分かっているのに行く人なんて誰もいないに決まってる。でも、行かなかつたらさらに酷くなりそうだなと直感的に思った。

「……」

なんか自分がある意味危機に晒されているのに、実感が無い。他人事みたいにしてる冷静な自分がある。急速に頭が思考が冷えていく。ああ、こういうときでも客観的に物事を捉える私って馬鹿だなと思ってしまった。

こういうときにこそ感情に任せればいいのに、それができない自分を馬鹿とかおかしいと思うけど、嫌いじゃなかった。嫌いじゃない。

「……いいですよ」

嫌いじゃないからこそ、曖昧な感情に任せて冷静な自分を捨てることなんてできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6723z/>

生徒会長様々？

2011年12月29日17時47分発行